

## 20055

DEB 使用時に OCT により高輝度シグナルの層が確認できた一例

患者は 66 歳男性 (HT・Smoke)。2013. 12. 17、労作性狭心症にて LAD #6 に PCI を行い、Nobori 3.5mm×18mm を留置した。6 ヶ月フォローアップにて ISR (75%狭窄) が認められた為、2014. 06. 17 に病変部を Laser (1.4mm concentric) にて焼灼後、Balloon (Lacrosse NSE 3.5mm×13mm) により拡張し、SeQuent Please 3.5mm×15mm にてパクリタキセルの塗布を行った。DEB 施行前後に OCT (SJM 社製 ILUMIEN OPTIS) を用いて血管内を観察したところ、血管内壁表面に明らかに DEB 前には確認できなかった高輝度シグナルの層、もしくは粒子状の構造物を確認した。

L-Mode にて、確認できる高輝度シグナル層の全長を測定したところ、高輝度シグナル層は 14.8mm にわたっており、使用した DEB 長とほぼ同程度の長さであることが確認できた (3D では確認されなかった)。

また、同様に DEB と OCT を併用している 12 症例について DEB 施行後の OCT 像を確認したところ、全ての症例において同様の高輝度シグナル層を確認することができた。

OCT は X 線透視像では確認できないパクリタキセルの内皮細胞への移行を、視覚的に評価できる可能性があり、治療予後へ寄与できる可能性が示唆された。今後さらに症例検証を重ねていくことで、定量性の評価などに繋げていきたい。